

『START！震災から一年に思うこと』

— 被災地を旅して —

May 2012

一年間、コラムを停止してしまった。

3・11(東日本大震災)から一年と二月が経ち、その間、震災復興支援企画として、震災三ヶ月後に千葉県柏市のホールにて実施(『[-時を刻み、時を生きる-谷川賢作ピアノコンサート](#)』)など、エピソードはあったのに、書けなかったのは、震災後に起こった多くの事柄がドラマチック過ぎたからに他ならない。

東京にいと被災地の復興や原発事故も過去の事となったかのような装を感じる。

震災直後に知人から「被災地に音楽を届けてはどうか？」との申し出もあったが、“時が経っても風化しない持続的な文化支援のシステムができないか？ NPO を立ち上げ幅広く展開出来ないか？”と様々な支援の実態の情報や関連記事を切り抜き、実演家、文化団体の支援のありかた、お付き合いのある演奏家、スタッフなどへの聞き取り、「文化芸術による復興推進」をテーマとしたシンポジウムにも顔を出したが、時だけが過ぎ、漠然とするばかり、それだけ今回の事態が想像以上だった。

4月になり支持者に、「現地を見て来てはどうか」と誘われ、最も被害の大きかった東北三県(岩手・宮城・福島)を旅してみた。

月日が経ったというのに、現地で感じた事は、ただ言葉を失うことの連続。

途方も無い津波の破壊力、青森県～千葉県に至るまで果てしなく続く、広範囲にわたる被災地域。未だに解決しない原発事故の行方。

そこに暮らす人達、自然、産業へ残した爪痕の深さ、復興に至る問題の複雑さ……。

南三陸町の既に瓦礫が撤去され、ダンプとすれ違うだけの荒野と化した海岸線をひた走っていた時、海沿いにポツンと建つ小学校の校舎を見つけた。

惹きつけられるように近づいて行き、(建物には入らないように肝に銘じてはいたが…)衝動的に玄関から職員室へ、階段を上がって教室……、音楽室……。

何の音も聞こえず、時が停止したような空間。廊下に、階段の踊り場に、教室に置き去りになった赤いランドセルが点在。当時の恐怖を物語、胸が痛む。

屋上に上がると夥しい貝殻。巨大な津波が校舎を破壊し乗り越えていったことが分かる。眼の前に広がる海は、何事もなかったように、春の陽光に輝き、穏やかに揺れ、美しい光景が却って虚しさを呼ぶ。

強く感じたのは、古里を失った喪失感。“ふるさと”とは自然であり友であり、家族…。

愛するものの総称。ある日、突然消え去り、奪い去られた心の傷は計り知れない。

♪ なかよし小道は どの道 　　いつも学校へ みよちゃんと
ランドセルしょって 元気良く 　お歌をうたって 通う道 ♪

童謡「なかよし小道」

童謡や唱歌で描かれた心象風景に象徴されるイメージの喪失。

そこに私達の仕事の価値があり鑑賞会で皆の心を解きほぐし、繋ぎとめる力もある。

仮設住まいの方、行政の職員、ボランティア団体など、多くの人から当時の状況や文化鑑賞会への貴重なご意見をお聞きし、そのたびに現状は厳しくも気丈に振る舞われている姿に頭が下がる。

多くの演奏家や芸術団体が手弁当で被災地に訪れ公演や支援をしている。

場所によっては飽和状態ともいえる活況もあると聞かすが、被災地の状況はとても複雑で多岐に渡り、日が経つにつれ風化し、忘れ去られる危惧もある。

東北は嘗て幾度も青少年対象の鑑賞会で馴染み、親しんだ土地。

訪れる度に豊かな海の幸、山の幸に舌鼓をうち、人情に触れ、山間にコダマする子供たちの歓声や、教室から流れる唄声…。

仕事で行きながら、心が癒され、体が解放されていくことに感謝した。

机上で練った企画書は捨て、小さな事でも、まず初めること、そのなかで自ずと方向性が出れば良いし、地道に活動が続けている団体を応援すること等。アイデアは広がる。

まず子供達や社会的弱者である高齢者、病を持つ人たちに暖かい企画を届けたい、地元の人々の求める番組を必要な場所へ、鑑賞行事の現場で培ってきた事務所のノウハウを役立てれば嬉しいし、シンプルに

Start させることを第一のステップとしたい。

答えは被災地にあり。多くの方の御意見、情報をお知らせ頂ければ幸いです。



荒野の蒼空に翻る

《黄色いハンカチ&鯉のぼり》

【岩手県陸前高田市】